

山田図南と千金方

— 千金方から傷寒論序文を考える —

松岡 尚則¹⁾、山下 幸一²⁾、栗林 秀樹³⁾、牧角 和宏⁴⁾
 岡田 研吉⁵⁾、山口 秀敏⁶⁾、別府 正志⁷⁾

¹⁾静岡県立こども病院外科, ²⁾高知大学医学部麻酔・救急・災害医学, ³⁾越谷大袋クリニック, ⁴⁾牧角内科クリニック
⁵⁾岡田医院, ⁶⁾信州医療福祉専門学校, ⁷⁾東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

山田正珍(図南)(1749-1787)は、傷寒論研究者必読の名著『傷寒論集成』を遺して、39歳(42?、57?の説もあり)で逝った考証学派である。

山田はその著『傷寒論集成』の中で『傷寒論』の序論について前半(始めから「思過半矣」まで)と、後半(「夫天布五行……」から末尾まで)とでは、内容と文章が相当に違っており、七つの徴候をあげ、前半と後半が二分されるような書き方がされていることを指摘している。そこで山田は、前半は『傷寒論』の著者仲景の自序であるが後半は、王叔和の補綴であると考えている。この論点に対して、荒木正胤は「七ヶ条の理由は一々尤もであるが、その補綴をしたのが王叔和であるという論証は何もあげていない。これこそ彼の独断である」とし、「前半は仲景の自序であり、後半は『雑病論』即ち『金匱要略』のために設けられたやはり仲景の自序とみるのが至当である」としている。この『傷寒論』の自序について、宋改を経ない『千金方』と宋改を経た『備急千金方』を用いて考察した。

宋改を経ない『千金方』において、『傷寒論』序文の前半に相当する文には、「張仲景曰」とあり、後半に相当する文には「方論曰」とあった。一方、宋改以降の千金方からはこの結論は引き出せない。宋改を経た『備急千金方』の新校備急千金要方例をみると、引用する文献を省略する編集方針が書かれている。このことから『備急千金方』では「方論曰」の語は省略されたものと考えられた。「方論」とは晋代に王叔和が採摭して「張仲景方論」卅六卷(「太平御覽」を七二二に引く高湛「養生論」に見る)を編次した書であることが類推された。一方、『傷寒論』は、小曾戸洋によると五世紀の『小品方』より「張仲景弁傷寒并方有九卷(傷寒の部)」「張仲景雜方有四卷(雜病の部)」と記録されていることから「張仲景方」もしくはそれに類した名称で呼ばれていたのだろうと類推している。これに準じるような書名の本から序論前半は引用されたものと考えられた。

つまり、山田正珍(図南)は宋改を経ない『千金方』からみると、『傷寒論』の序文に関して正しい考察をしていたことが判る。それでは、山田は『千金方』一遺唐使将来本をみることであったのであろうか。

宮内庁書陵部所蔵の古鈔本『千金方』一遺唐使将来本は、序文右上に吉田宗恂(1558~1610)の蔵書印「吉氏家蔵」の陰刻印記があるので、天正三年以降に吉田家へ所蔵が移ったと考えられている。江戸幕府の書物奉行であった近藤重蔵の「好書故書」(1826)巻五四書籍四に「吉田家譜に宗皓慶長十五戌年家督して意安と改め直に御側に奉仕云々此節駿府に居宅の地を賜い、父法印宗恂の遺物献すべしと仰出されしかば、東照宮に杜氏通典一部奇效良方一部、台徳院殿に千金方一部を献ず(重守按=寛永系図伝=此事見へズ)」とあることから、吉田宗恂の死後、徳川家の管理に移っている。しかしながらこの『千金方』一遺唐使将来本は江戸時代いったん、失われていた。文政年間(1818-1830)、書肆、英平吉が銭二百文にて、購入。多紀菫庭(元堅)に販売し多紀氏聿修堂所蔵本となった。

慶長十五年(1611)には徳川秀忠(1579-1632)に献上されたはずの『千金方』は、いったん、失われ、文政年間に現れている。近藤重蔵の考察によるように、寛永年間(1624-1644)の寛永系図は記載がみられていない。山田正珍の家系は代々幕府の医官であったため『千金方』一遺唐使将来本を閲覧できた可能性はあるといえるが、実態は不明である。

『宋板傷寒論』は『方論(張仲景方論?)』と『張仲景?』という本からなるハイブリット本であることが判明した。また、『宋板傷寒論』自序の前半は仲景の自序であるが、後半は王叔和の補綴であるという山田正珍(図南)の推測は正しいものであると考えられた。